
雪 ~コナン哀ものがたり・番外編3~

サブラピッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪～コナン哀ものがたり・番外編3～

【Zコード】

Z7216C

【作者名】

サブリピット

【あらすじ】

阿笠邸での少年探偵団のクリスマスパーティーで、ちょっとした騒ぎが起こります。コナンと哀が姿を消したことになづいた歩美、光彦、元太は・・・

(前書き)

「ラブなコ哀です。苦手な方は、ご遠慮ください。少年探偵団と
阿笠博士が少し登場。

賑やかな声が阿笠邸に響いている。12月半ばのこの日、コナンと哀、光彦に元太、歩美といつもの少年探偵団のメンバーがクリスマスパーティーをしていた。主催は、家主の阿笠だが、料理やプレゼントの用意などは、哀と歩美の指導のもと、子供たちがやっていた。

いつものように、賑やかに騒いでいる3人を見守るようなコナンと哀。この年、もう小学6年生になっている。

他の3人も、体も、心も随分成長している。そして、コナンと哀の仲を冷やかしたりすることも多くなり、実際の年齢では、10歳も上のはずの2人でも、時々、顔を赤くさせることも多くなっていた。

「あつー雪だ！」

歩美の声にみんながリビングの大きな窓を見る。すでに、時刻は夜6時を回り、暗い空から、白い雪がリビングの窓明かりにうつすらと照らされ落ちている。

見る間に、その数が増えてきた。

「ほんとですね。結構、大粒で、たくさん降つてますね」

光彦が言つ。

「今日は、寒かったもんな」

元太が光彦の後に立つて言つた。

「じゃ、そろそろプレゼント交換しよう！」

歩美がそう言つて、集めたプレゼントを無作為に渡し、みんなに

回すように促した。

今日は、阿笠が3人を車で送つて行くことにしている。多少、遅くなることは、それぞれの親に連絡をしてあつたので、安心して騒げるためか、いつも以上に3人のテンションが高い。

コナンと哀にしてみれば、もう5年以上も彼らと付き合つていることになる。最近は、驚くようなマセたことを言うようになつてしまし、いろいろ知識も増えてきた。コナンと哀にとって、子供らしい成長を見せる彼らと過す時間は、次第に楽しく、かけがえのないものになつてきていた。

途中、哀は、トイレに行こうと席を外した。

トイレから出て、リビングへ行くまでの廊下、大きな窓に映る自分の姿の向こうに雪が落ちている。

それを見ていると、哀は、フト、あの日を思い出した。

5年前、杯戸シティホテル。雪が降り積もる中、ジンに撃たれたこと。ピスコに拳銃を向けられたこと。もう少しで殺されるところだった自分を助けてくれた彼。

以前は、眠っているときの悪夢として、または恐怖と共に思い出していたこの事件も、今では、自分でも驚くほど冷静に、過去の思い出として心に映すことができる。無論、いい思い出であるわけはないが、あの日、彼が貸してくれたジャケットのぬくもりと、自分を背負う彼の背のぬくもりは、哀にとってかけがえのないものになつていた。

そして、その同じぬくもりが今、哀を包んでくれている幸せ。いろいろな想いがめぐり、哀は、足を止め、しばらく雪を見ていた。

「「」」たなとこにいたのか」

突然、聴きなれた彼の声がした。あの日、自分を助けてくれた彼、暖かい背中の主が哀の後に立っているのが窓に映っている。

「どうかしたのか？遅かったから、様子を見に来たんだけど……何か、考え込んでいいようだつたけど？」

「ちょっとね・・・雪を見ると、どうしても、思い出しちゃうの。杯戸シティホテル・・・もう、5年たつたのね」

哀は、後に立っているコナンに振り向きもせずに言った。

「ああ。あの時は、必死だつたな・・・正直、あの時、おめえのことを好きじゃなかつたかもしだねえ。でも、死なせたくないつた・・・何とかしてやるつて、約束したばっかだつたしな」

「今は？」

哀が少しそねたような声で訊いた。

「愛してるに決まつてんだる」

哀は、窓に映るコナンをずっと見ていた。彼は今、照れたような顔をしているが、ガラスに映る姿では、顔が赤いのまではわからない。そして、コナンも、窓に映る哀を見ている。

哀は、スッと、倒れこむようにして体を後に傾け、コナンに体を預ける。その華奢な体を受け止めたコナンは、後からそつと、哀を抱きしめた。

自分と、自分を受け止めた彼を映す窓を見ながら、哀は、自分を

抱きしめる暖かい腕に、手をかけた。

自分と彼を移す窓の向こうには、白い雪が舞っている。

「哀・・・」

「コナンが愛しげに名前を呟くと、哀を自分の方に向かせて、肩を抱いた。さつきまで、窓に映るお互いを見つめあっていた2人が、直接みつめあう。

哀の手がコナンの胸に当たられると、ふたりの唇が重なった。

「やつたーー！」
「バッチリ、撮れましたよ！」

「！」

突然、フラッシュが光り、声がした。コナンと哀がハッとその方を向くと、歩美達が一人を見てニヤニヤしている。光彦はデジカメを手にしていた。

「光彦、見せてみろよ・・・おー、バッチシ撮れてんじゃん！」
元太がデジカメを覗き込んで言つ。

「タイミング、バッチリでしたね。我ながら、うまく撮れました。お一人、大人っぽいですから、ホント、決まっていますよ。写真つて、モデルも良くないと、こうは綺麗に撮れません」

光彦が一人納得した表情でいると、歩美も横からその画像を覗いて、コナンと哀の方を見ると、

「うん！バッチリ、コナン君と哀のキスシーン・・・綺麗だね。まるで、映画のラブシーンみたい」
ピースサインを二人に向けながら言った。

「哀、携帯に送つてあげるね。コナン君にも・・・後、蘭さんや園子さんにもメールで送つておくかな？」

キスしたままの体制で固まつていたコナンと哀だが、ハツと我に返つて、慌てて離れた。

「おい！おめえら！・・・その写真、消せ！」

コナンが光彦の方に行くと、三人はコナンから逃げておどけてみせ、

「だめー・・・博士、みんなに送るから、パソコン貸して」
そう言つ歩美を追いかけようとするコナンを、元太が羽交い絞めにして阻止してくる。

「じてやられたの、コナン君」

阿笠も「ヤーヤして、歩美にパソコンを貸してくる。

元太に抑えられたコナンが哀の方を振り向くと、

「おい！おめえも止めろよ！」

と、言つたが、哀は、クスクス笑つてゐただけだった。

「こんなところで、不用意にキスする方も悪いわね」

他人事のように言つたので、コナンは、ため息をつき、肩をすくめるしかなかつた。

「歩美ちゃんが、お一人がいなくなつたから、せつと、心にかでキスでもしてゐるんだろ？って・・・当りでした」

光彦が笑つて言つ。

「で、後学のためにみんなで見学しようってな

元太がコナンの横腹を肘で小突きながら「ヤーヤーして言へ。

「写真も押せたし……コナン君と哀、当分、私達の言いなりね博士にパソコンを借りて、写真をどこかへ送つたらしい歩美も意地悪い笑いを浮かべている。

「……おめえら……」

絶句しているコナンと深いため息をつく哀。
さすがのコナンと哀も、今回ばかりは、この年の離れた友人たちに完全にやられてしまった。

その夜の雪は、見る見るうちに積もつた。久しぶりの大雪に、さすがに阿笠も車を出すことができなくなり、全員、阿笠邸に泊まることになった。

コナンと光彦、元太は、2階の部屋で寝ることになり、歩美は、哀と一緒に彼女の部屋で寝ることにした。

「「めんね、哀。ほんとは、コナン君と一緒に寝たかったでしょ？」歩美が「ヤーヤしながら言つ。

「そんなこと言つなら、私の部屋に入れてあげないわよ」「「めーん。哀さんの部屋に泊めてください」手を合わせて歩美が言つ。

「さあ、どうしようかしら?」

哀が意地悪気な表情で言つと、

「哀のいじわる。やつきの写真、クラスの全員に送つてやるから。それから、プリントして、町中に張り出してやるんだから」

「降参。わかりました、私の部屋で寝てください、歩美さん」
哀は、頭を下げて頼むマネをして、歩美を上田で見る。そして、二人で笑い合つた。

「コナン君。寝るんなら、わしの部屋でもいいがの」
阿笠は、一人で寝るのは寂しくなつたのだろうか、コナンたちに言つた。

「いや・・・三人も寝れねえだろ? 2階の部屋、借りるよ」
コナンは阿笠に応えた後、光彦と元太に囁いた。

「博士と一緒に、イビキで寝られねえからな」

「そうですね」

「博士のイビキ、半端じやねえもんな」

光彦と元太も頷いた。

* * * * *

「ね、哀。来年は、中学生だね。私ね、哀と友達になれて、ホントによかつたつて思う。それに・・・哀さ、コナン君と付き合つようになつて、よく笑ってくれるようになつたし、今ね、歩美、ホントに幸せなんだ。哀のお蔭だよ」

哀の部屋で、哀と並んで寝ている歩美が言つた。

「そんなことないわ。私の方こそ、あなた達に感謝しているわ。私のような素直でも、可愛くもない女を仲間にしてくれたんだもの」

「ううん。哀は、十分に可愛いし、綺麗だし……私の丑慢だよ、哀が友達だっていうの。コナン君と光彦君、元太君もね」

「ありがと、歩美」

「えへ……ねえ哀、中学に行つても、友達でいてくれるよね」

「もちろんよ」

「ところでわ」

歩美が上半身だけを起こして、哀の方へ向いて言う。

「哀とコナン君ってわ、こつもあんな風にキスしてるわけ?」

「は?」

「だつて、ホント、映画のシーンみたいだつたから」

「あなた達、どこから見てたの?」

哀は、少し慌てて訊いた。

「哀がコナン君にもたれ掛つたところから……」

「そう」

哀は、その前の会話を聞かれていなかつたことにホッとした。その反応に歩美は怪訝な表情をしていたが、

「何?……なんか聞かれたくない話でもしてたわけ?」

「え?……あ、そんなことはないけど……」

「そおかな?……ま、いいけど。哀とコナン君のヒソヒソ話つて、今に始まつた」とじやないもんね

「哀は、そう言われると、一言もなく、ため息をつくだけだった。

歩美には、わかつてゐる。いや、感じているといった方がいいだ

ろう。コナンと哀から聞かされたわけではないが、一人が何か重いものを抱えていることを。

一人から感じる独特な空気。ただ、仲が良いとか、付き合っているとか、そういうものだけではない、一人だけの関係。そこには、誰も入れないということも。

でも、自分は、一人の親友であることは間違いない。コナンも、哀も、自分や光彦、元太のためであれば、危険も顧みず、助けてくれるだろう。そして、それほどの友人関係であつても、いや、友人であればこそ、一人には、一人だけにしか、わからないものがあるのだということが、よく理解できる。5年も傍にいて、付き合ってきたのだからこそ、それが感じられるのだ。

元々、一人が身にまとう雰囲気は、大人たちも一目置くような、自分たちと同じ小学生ではないと、感じさせるものだつた。どこが違うといわれると、説明するのは難しいが、でも、明らかに違うものを持つ二人。そして、一人が最も信頼しているのは、周りの大人たちではなく、それはお互いのこと。コナンが最も信頼しているのは哀であり、哀が最も信頼しているのはコナン。

自分から見れば、何でも知つていて、何でも出来るようなコナンが、唯一、物事を尋ねたり、相談するのは、哀だけ。そして、いつも冷静で、博識な哀が、唯一、その瞳を揺らし、頼つているのは、コナンだけ。そこには、他の人間には見せない、お互いだけが見せる真の姿があるように思える。

二人の間にある絶対的な信頼関係は、お互いを理解していなければ生まれない。二人の傍にいて、一人を見てきた歩美には、そのことが理屈ではなく、感覚でわかつていた。そして、その二人の姿を見

て、共に行動してきたことは、歩美自身をも、大きく成長させた。

「哀、私ね、哀とコナン君が大好き。いつまでも仲良くな。仲の良い二人が大好きだから・・・」

歩美は、明るく哀に言つ。

「ありがとう、歩美」

哀は、実際は10歳も年の違つ親友に、心から感謝して言つた。

* * * * *

「でもよ。羨ましいよな。灰原つて最近綺麗になつたし、前に比べたら、可愛くもなつたし・・・コナンつて、いいよな」

三人分の布団を敷いた部屋で、パーティーの料理の残りをしつこく食べている元太が心底羨ましげに言つた。

「そうですね。灰原さんつて、3年生の時に長期入院してから、随分、表情が柔らくなつたし、笑うことも多くなりましたしね。結構、他の男子でも、灰原さんが好きだつていう人、多いですよ」

光彦は、まだ食べている元太を半ば呆れて見ながら言つた。

この二人は、以前から歩美に好意を持つていることは、コナンもよく知つていた。そして、勉強家で、同年代では博識の光彦が、さらに博識の哀に尊敬と思慕の念を抱いていることも。

光彦も感じている。コナンと哀には、普通の小学生とは違う何かがあることを。一人の間には、付き合つというようなレベルを超えて

たものがあるということを。

言葉にしなくても通じる何かを持つ一人。お互いを信じている一人。そして、何か深い哀しみ、辛さのようなものを共有している一人。

3年生の時、コナンと哀が長期入院して半年も学校を休んだ後、コナンと哀の全快祝いとクリスマスパーティーを兼ね、阿笠邸にみんなで集まつたことがあった。

少年探偵団と、東尾マリアなどクラスメートが数人、蘭と園子、佐藤刑事と高木刑事、大阪の服部平次と遠山和葉もやってきて、賑やかに過した。光彦にとつても、楽しい思い出になつてているこのパーティーだが、今でも、ドラマのシーンのように印象に残つてゐる場面がある。

蘭が哀に声をかけ、一人でしばらく話しているとき、その様子をコナンが見つめているのに気づいた。コナンは、その時、フツと僅かな笑みを口元に浮かべた後、辛そうに俯いた。そして、そのことに気づいた哀がコナンに向けた、包み込むような優しい眼差し。

しばらくして、哀は、蘭から離れ、コナンの傍に行くと、母親のように、そつとコナンの頭に手を触れ、微笑んでみせた。その笑顔にコナンも微笑んでみせる。そして、コナンと哀は、園子や佐藤刑事と笑顔で話している蘭を優しげに、それでも、どこか哀しげに見つめていた。

「コナンと哀、蘭の間に何があるのか、それはわからない。でも、10歳も年上の蘭を気づかう一人の眼差しは、明らかに小学生のではなかつた。わかり合つた一人にしかできない表情と、言葉な

き会話。この時、光彦は、二人の間には、自分の知らない何か、二人だけが共有している何かがあることを感じていた。

「コナン君、灰原さんのこと、大事にしてくださいよ
「ああ? どうしたんだよ、急に」

「だつて、灰原さんて、初めて会つた頃は、どこか哀しそうで、辛そうで、寂しそうでしたけど、今は、よく笑っていますし、以前のような表情は、ほとんどしなくなりました。それって、コナン君と付き合つてからでしょ?だから、その笑顔を守つていつてほしいって思うんです。もう、寂しそうな彼女の顔、見たくありませんからね」

「光彦・・・」

「コナンは、この眞面目な、少し大人びた友人の、哀への想いを知つていてる。

「ああ。アイツは、もう大丈夫だよ。以前のアイツに戻ることはねえさ。そしてさ、それは、俺だけじゃなく、歩美や元太、光彦のお蔭でもあるんだぜ。おめえ達がアイツを友達、仲間と思つていてくれる限り、アイツは、いつも笑つてくれるさ」

このコナンの言葉に、光彦は、やっぱりコナンには叶わないと思つた。そして、哀がコナンを好きになつた理由が、改めてわかつたような気がした。

光彦と元太が眠つたのを確認すると、コナンは、部屋を出て、1階のリビングに戻つた。灯りを付け、キッチンへ行つてコーヒーを

入れる。切つてあつた暖房を入れ、コーヒーを持ってソファに座つた。

「眠れないの？」

「コナンが声のする方に目をやると、哀が階段を降りてくる途中だつた。

「ああ・・・おめえもか？」

「ええ。まあ、まだ11時前だもの」

「コーヒー飲むか？」

「ええ、頂くわ」

哀がソファの傍まで来る。

「待つてろ」

コナンは、そういうつてキッチンへ向かつた。

「コーヒーを前に、並んで座つてゐる二人。とくに話をするわけでもなく、ただ、まだ降り続いている雪を眺めていた。

何分間、そうしていただろうか？ふと、コナンが口を開いた。

「あいつら、子供だと思つてたけど、随分、成長しているな

「え？」

「光彦や元太たちだよ・・・さつき、光彦に言われたんだ。おめえを大事にしろつて。もう、前みたいな寂しい顔や辛そうな顔をさせるなつて。アイツも、おめえのことが好きだかんな。いろいろ、気づかつてんだろう？」

「そり・・・歩美も言つてたわ。あなたと仲良くしろつて。私達、

彼らに随分心配されてるのね・・・フフ・・・ビッチが子供なんだ
か・・・

哀は、おかしそうに笑う。

最近は、こんな優しい、素直な笑顔をしてくれるようになつた哀。
この笑顔は、何より、コナンに安らぎをくれる。

「そだな」

「コナンも笑う。

この笑顔は、哀の大好きな笑顔。哀に生きる希望をくれた、幸せ
をくれた大事な人の笑顔。

哀がコナンの肩に頭を預ける。そつと、コナンの手が哀の肩にま
わされた。

「哀、笑つていってくれよな。俺の傍で・・・」

「コナンが呟くように言った。

「あなたと居れば、笑つていられるわ・・・ただ、傍にいると、事
件に巻き込まれるから、少し自重しよつかとは、思うけどね」

「コナンは、自分の肩にある哀の頭を起し、少し意地悪く笑うその
顔を軽く睨む。

「可愛くねえな」

「あら、今頃わかつたの？」

そう言つて、見つめ合つて笑う。

そして、目を閉じ、お互いの唇を近づけた時、コナンが目を開け、
その動きを止めた。そして、当たりを見回す。

その気配に目を開けた哀が、怪訝な表情を浮かべて訊く。

「どうしたの？」

「アイツら、またカメラ持つて、どうから覗いてんじゃねえかと思つて・・・」

その口ナンの言葉に、哀も当たりを見回す。

「大丈夫みてえだな」

一人で、顔を見合させて、静かに笑つた。そして、もう一度目を閉じ、今度は、そつと唇を合わせた。

(後書き)

なんと、季節はずれな話しなんだ！

投売りセールで買った「ロナン」TVシリーズのビデオ、「黒の組織との再会」を観て、思いつきました。

例の「」とぐ、一気に書いたので、自信はありません。
最後まで読んでくださった方に、感謝！です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7216c/>

雪～コナン哀ものがたり・番外編3～

2010年10月13日11時06分発行